

抜粋

千總文化研究所 年報

【 第 3 号 】

2020年5月—2021年4月

Institute for Chiso Arts and Culture
Annual Report [Third issue]
May 2020—April 2021

目次

ご挨拶

千總文化研究所 代表理事 西村總左衛門 ————— 002

〈第1章〉 結ぶ—千總の文化

千總文化研究所の活動方針 ————— 008

千總の有形・無形の文化財

千總コレクションについて ————— 010

千總の技術について ————— 022

〈第2章〉 見つめる—研究活動

[史料研究 1]

真宗大谷派の法衣装束・荘厳具の調査 ————— 028

千總文化研究所 所長 加藤結理子

中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ

中世日本研究所 研究員 宮尾素子

京都府京都文化博物館 学芸員 林 智子

「御装束師 千切屋惣左衛門」に関する資料 ————— 036

法衣装束 ————— 038

文様 ————— 042

織組織 ————— 052

真宗大谷派 姫路船場別院 本徳寺所蔵の法衣装束・荘厳具一覧 ————— 059

大谷佳人氏所蔵の法衣装束一覧 ————— 064

[調査報告会・研究会]

真宗大谷派の法衣装束の調査報告会・研究会 ————— 066

【調査報告】

「真宗大谷派の法衣装束と千切屋惣左衛門」2020年度調査報告

千總文化研究所 所長 加藤結理子

【講演】

「祈りの形—尼門跡寺院と真宗大谷派寺院に伝わる染織品をめぐって—」

中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ

【ディスカッション】

同朋大学 教授 同朋大学仏教文化研究所 所長 安藤 弥

真宗大谷派圓正寺 住職 山口昭彦

真宗大谷派姫路船場別院本徳寺 列座 本谷 廣

コーディネーター：千總文化研究所 所長 加藤結理子

[史料研究 2]

千總所蔵の打敷および水引の図案の調査	070
打敷・水引図案	074
今尾景年と千總のつながり	082
千總所蔵の打敷および水引の図案一覧	083
打敷および水引 墨書リスト	086

〈第3章〉繋ぐ—教育活動

[特別講演会]

皇室文化と京都伝統の技	088
-------------	-----

講師：彬子女王殿下

社会活動	092
展覧会協力	093
謝辞／研究所基本情報	094

真宗大谷派の法衣装束・荘厳具の調査

調査者

千總文化研究所 所長 加藤結理子
中世日本研究所 所長 モニカ ベーテ
中世日本研究所 研究員 宮尾素子
京都府京都文化博物館 学芸員 林 智子

[概要]

2019年度から2020年度にかけて、真宗大谷派姫路船場別院本徳寺（以下、本徳寺）が所蔵する法衣装束・荘厳具159点および、真宗大谷派の門首一族である大谷佳人氏が所蔵する法衣装束50点を対象に調査を行った。江戸時代から昭和時代にかけて制作され、僧侶が着用するなど、寺院で使用された染織品群である。

本調査の主な目的は、株式会社千總（以下、千總）が、創業の室町時代から大正時代にかけて法衣および打敷や水引といった荘厳具を扱う法衣商として活動していた実態と、それら染織品の成立背景の手がかりを掴むことであった。千總には、法衣装束および荘厳具の制作に関する見本裂帖や仕様書、図案などの資料、真宗大谷派の本山・東本願寺の御用商人であることを示す江戸時代の鑑札が残されているが、納めた染織品については、これまでほとんど明らかにされていなかった。

本調査では、法衣商である千總が「御装束師千切屋惣左衛門」として手がけたと考えられる法衣装束が約20点確認された。また千總以外の法衣商の名前が15件見られた。

さまざまな種類の法衣装束とそれらに見られる色や文様は、当時の京都における豊かな染織文化を示すものであり、本資料群は京都を起点とした人とモノの交流を窺い知ることのできる貴重な資料と言える。

千總に伝わる資料との詳細な比較調査研究は今後実施予定ではあるが、2年間の調査の概要を報告する。

本調査は、2019年度文化庁文化芸術振興補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」、2020年度公益財団法人カメイ社会教育振興財団「博物館学芸員等の内外研修に対する助成」のもと実施された。

【法衣装束の着用者】

本徳寺ならびに門首一族である大谷家の大谷佳人氏の元には、着用者（注文主）の記録は残されていない。

本徳寺所蔵の法衣装束が包まれていた畳紙には、松印、椿印、桐印、蔦印、つる印、大谷佳人氏の所蔵品の畳紙には、亀印、華印、桑印などの墨書が合わせて36点確認された。これらは、公家文化で内々に用いる大谷家一族の個人を指す記号であり、着用者を特定する手がかりであるが、現在ではその印が示す個人を容易に特定できないものが多く、今後の調査が俟たれる。

一方、本徳寺および大谷佳人氏の所蔵品の畳紙には「拝領」「御譲」「潤色」といった墨書が複数点確認された。これらは、譲渡により法衣装束の着用者が代わること、潤色（染め替え）を行われるなどして仕様を変化させながら受け継がれる場合があることを示唆する。また本徳寺所蔵品の中には、東本願寺の別邸であった「皆山邸」と記された墨書も確認され、法衣装束を通じた東本願寺と本徳寺の交流が窺い知ることができる。

【法衣商】

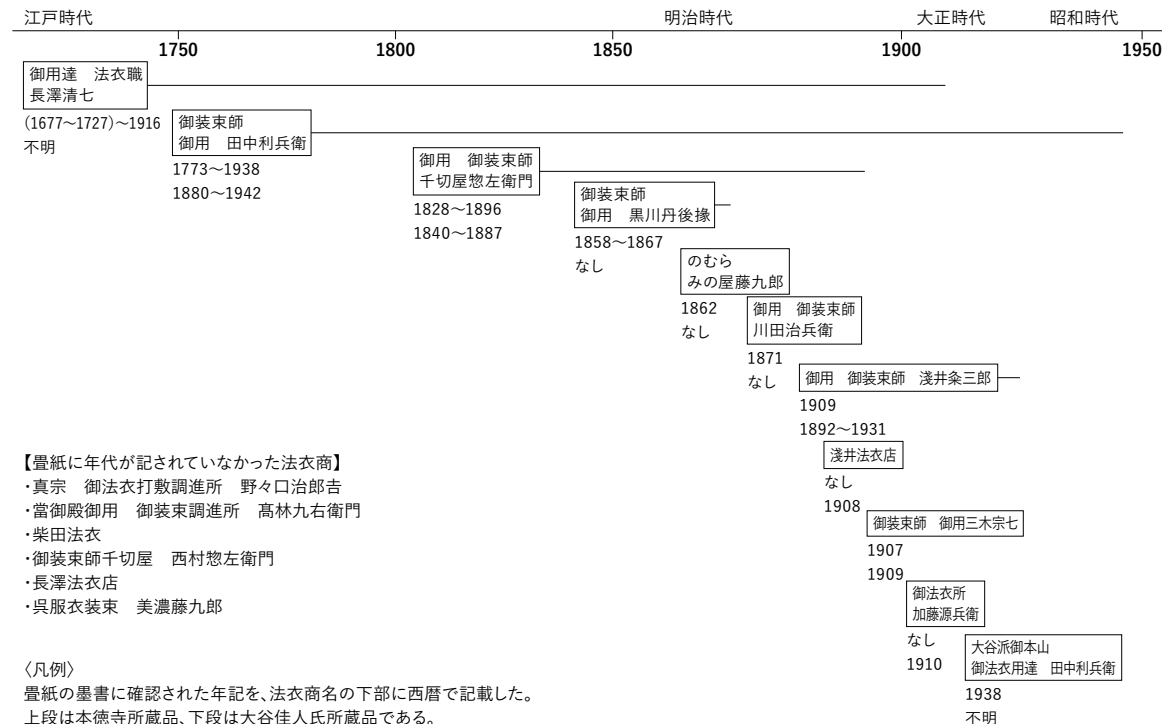
畳紙に捺された印で確認できる法衣商の名称は、本徳寺および大谷佳人氏の所蔵品を合わせて以下の16件であった。

千切屋惣左衛門（千切屋 西村惣左衛門）、三木宗七、川田治兵衛、高林九右衛門、長澤清七、長澤法衣店、田中利兵衛、田中利兵衛、加藤源兵衛、浅井条三郎、浅井法衣店、黒川丹後掾、野々口治郎吉、美濃屋藤九郎、のむらみの屋藤九郎、柴田法衣（順不同・（）内は筆者が追記）

同じ法衣商の名前でも、印の縁取りや文字の種類が異なるものがあり、時代の変化などが窺えた。また「御用達法衣職」「御用御装束師」「御法衣所」といった法衣商の名称に冠される職業名も複数種が確認された。15種類の印には京都の住所が記されていた。

法衣商の印と畳紙に記された年記をまとめたものが、【表1】である。江戸時代後期から大正時代にかけて、本資料の注文主の元に入りしていた法衣商に少しずつ入れ替わりがあることが推測される。（法衣商の印は、35ページ参照）

【表1】法衣商の名前と畳紙に記された年記



「御装束師 千切屋惣左衛門」に関する資料

千總に伝わる〈西村氏系図〉(寛保3(1743)年)によると、千切屋一門の遠祖は宮大工で、春日大社の若宮おん祭の威儀物である「千切台」を毎年制作し、奉納していた。その故事に因み、一門の始祖である与三右衛門よさうえもん(よざえもん)は、弘治年間(1555-1558)に京都で法衣の商いを始めるにあたり千切台を商標とし、屋号を千切屋と称した。

千切屋惣左衛門は与三右衛門の曾孫にあたり、寛文9(1669)年より法衣商を始めたとされる。千總が所蔵する法衣商に関する資料は、主には鑑札、文書、法衣装束や打敷の雛形や図案、見本裂帖などで、今後詳細な調査を実施予定である。

鑑札

駒形で片面に五環紋の印と「六条御殿 御用 御法衣」の墨書、もう片面に「天保八酉年正月改」「千切屋惣左衛門」の墨書が見られる(Fig. 1-1、1-2)。六条御殿、すなわち東本願寺の御用商人であったことを示す資料である。だが、千切屋惣左衛門がいつから御用をつとめていたのかは今後の研究が俟たれる。また明治10(1877)年の年記を持つ小型で長方形の鑑札も現存している。

文書

安政元(1854)年に東本願寺から御用商人に対して口達された命令を翌年に1冊にまとめた〈六条御殿御出入方中江口達乃写并当方勘定書〉、文政13(1830)年に注文を受け、天保6(1835)年に納めた道服や指貫などの記事や寸法が細く図入りで示されている〈法衣仕様帖〉(Fig. 2)等の直接商いに関わる資料の他、5代惣左衛門が飛鳥井家と難波家より与えられた蹴鞠の免状など公家との関わりを示唆する資料がある。

法衣装束、織見本裂類

道服や袴などの法衣装束が数点の他、「輪袷袋函」「御殿用箱」などの墨書がある木箱に収められた未仕立ての輪袷袋や組紐類、冊子に貼られた相当数の見本裂がある。

見本裂の冊子(Fig. 3)は約10冊あり、うち3冊には「御用御装束師 千切屋惣左衛門」の印があり、法衣装束の受注にあたって色や文様の見本として使用されたと考えられる。一方、印のない冊子に貼られた裂地には「深量院様」や「梶井様」といった東本願寺の門首や三千院門跡の法親王といった着用者や納めた年の墨書も見られ、納品後の記録として保管されたと考えられる。

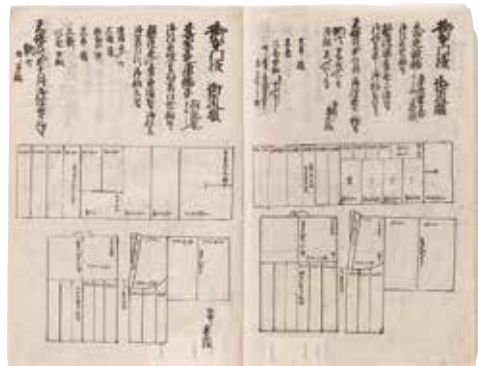
雛形、図案

原寸と思われる大きさの袷袋の雛形に文様が彩色で描かれたもの(Fig. 4)や袍や道服などの小型の雛形、法衣装束の制作に関すると考えられる図案類が相当数あり、法衣装束の制作過程の一旦が窺える。

その他、京都各地に所蔵される文化財の意匠を描き写した図譜類もあり、紋様などに関して伝統的な知識が求められたことが示唆される。



(Fig. 1-1、1-2)〈御用商売鑑札〉 天保8(1837)年



(Fig. 2)〈法衣仕様帖〉 文政13~天保6(1830~35)年

法衣装束・荘厳具の文様



(Fig. 1) 破れ卍・花の丸
〈赤織子地破れ卍に花の丸 袴〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 2) 牡丹唐草
〈白織子地牡丹唐草 直裾〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 3) 唐花唐草
〈白綾地唐花唐草 五條袷裳〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 4) 竜唐花
〈黄唐子色地竜唐花緞夷錦 御前五条〉部分
嘉永元 (1848) 年 (H)



(Fig. 5) 蜀江金襴
〈鍔朱綾地蜀江金襴 五條袷裳〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 6) 松立瀑
〈紅頭紋紗地松立瀑 半尻〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 34)桐鳳凰
〈白茶平織桐鳳凰 前五條袷袷〉部分 江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 35)菱八藤
〈緑綾地菱八藤 輪袷袷〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 36)唐花唐草
〈赤紫織子地唐花唐草 七條袷袷〉部分 明治時代～大正時代 (19世紀後半～20世紀前半) (H)



(Fig. 37)小葵・花鳥唐草
〈紫綾地小葵花鳥唐草 輪袷袷〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 38)雲龍
〈紺織子地雲龍 前五條袷袷〉部分 江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)



(Fig. 39)入子菱・牡丹唐草
〈白茶織子地入子菱牡丹唐草 輪袷袷〉部分
江戸時代中期～大正時代 (18世紀～20世紀前半) (H)

千總所蔵の打敷および水引の図案の調査

〔概要〕

千總には、相当数の打敷および水引の図案が所蔵されている。室町時代の創業より法衣商として活動していた千總は、僧侶の衣服である法衣装束のみならず、打敷や水引といった寺院の御堂を荘厳する染織品も手掛けていたと考えられる。

千總文化研究所は、2019年度から2020年度にかけてこれらの図案の調査を行い、写真撮影および寸法・技法・模様の記事作成、一部の図案に記された墨書の翻刻を行った。

本資料には、紙に墨または彩色により模様が描かれた肉筆のものが多数を占めるが、その他に型紙を用いて模様が刷り出されたものや、特定の形に切り抜かれた別紙を貼り付けることで模様が表されたものも確認された。本資料の全

体数は約90点で、その寸法は大小さまざまである。その内の18点には、制作年、納品先、用途、使用した生地の種類と色、模様の名称、技法の名称等が記された墨書が確認された。模様の傍らに色や寸法等が記されているものもあり、本資料は制作過程において職人への指示書の役割も担っていたものと思われる。

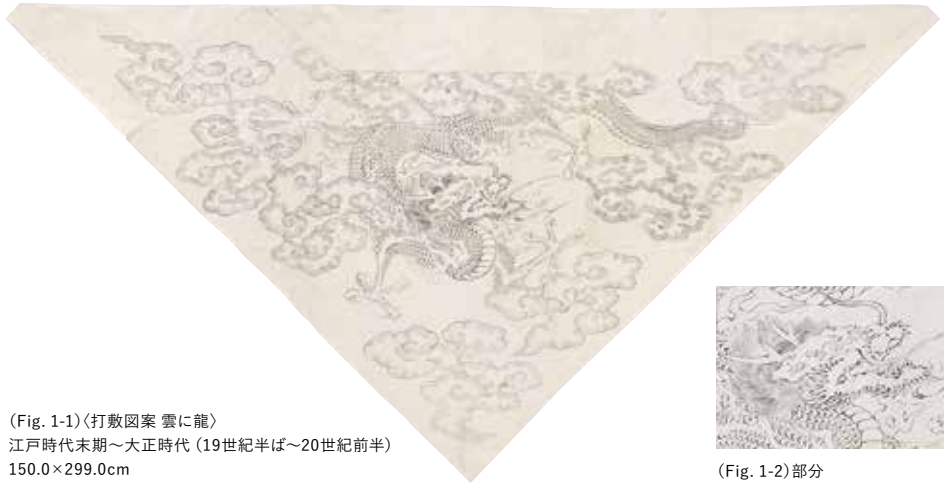
図案は染織品の制作において最初の工程で作られるものであり、千總が手がけた染織品に関する貴重な記録とも言える。詳細な調査は今後実施予定だが、本稿では資料の概要を報告する。

本調査の一部は2019年度文化庁文化芸術振興補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」のもとに実施された。

打敷・水引図案

Uchibiki / Mizubiki

紙に墨または彩色により描かれた肉筆のものが多数を占め、模様は、龍、鳳凰、鶴、獅子などの動物や、菊、桐、牡丹、木蓮などの植物の他、八藤紋、法輪など多様な模様が見られた。長辺が六〇〇センチメートルを超える大型のものから、三〇センチメートル程度の小型のものまで確認された。



(Fig. 1-1)〈打敷図案 雲に龍〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)
150.0×299.0cm



(Fig. 1-2)部分



(Fig. 2-1)〈打敷図案 桐鳳凰〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)
179.0×215.5cm



(Fig. 2-2)部分



(Fig. 3-1)〈打敷図案 牡丹唐草〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)
247.5×494.5cm



(Fig. 3-2)部分



(Fig. 13-1)〈打敷图案 孔雀に鶴、鸚鵡〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)



(Fig. 13-2)部分



(Fig. 14)〈打敷图案 網代に菊〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)



(Fig. 15)〈打敷图案 花喰い鳥〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)



(Fig. 16)〈打敷图案 龍と鳳凰〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)



(Fig. 17)〈打敷图案 雲に蓮華〉
江戸時代末期～大正時代 (19世紀半ば～20世紀前半)



今尾景年と千總のつながり

今尾景年(1845-1924)は、三井呉服店出入りの友禅悉皆業を営む今尾猪助の三男として弘化2(1845)年に京都で生まれた。幼名は猪三郎、名は永勸、字は子裕、号は景年、聊自樂居など。11歳で浮世絵師の梅川東居に師事し、のちに鈴木百年に入門。写生に基づく典雅な花鳥画の名手として知られている。景年は明治37(1904)年に帝室技藝員に任命され、のちに文展審査員などを務め、他方で京都府画学校(現 京都市立芸術大学)において教鞭をとるなど、明治・大正期の日本画界をけん引した画家のひとりである。

景年と千總の12代当主・西村總左衛門(12代西村)との仕事で、世界的に認識されているのは『景年花鳥画譜』(明治24、25年)(Fig. 1)だろう。染織製品のデザインの下上げを狙って、職人に向けて作られた本書は広く普及した。しかし、景年との関係はこれに留まらない。

千總の所蔵品によると、景年との関係のはじまりは、明治6(1873)年頃まで遡る。当時は写生画よりも南画が人気であったらしく、生活のために12代西村のもとで製品の下絵制作をしたと、景年は回想している。景年は、打敷などの法衣製品を含め、複数分野の製品の下絵制作に携わった。一つは型友禅などの友禅製品。千總所蔵の友禅染裂のうち、景年の下絵とされるものは、明治6~27年に制作された計8点である(Fig. 2)。景年の繊細な花鳥表現を活かした、絵画と見紛うようなデザインが多い。こうした迫真の表現を持つ千總の友禅は、当時高く評価された。もう一つは、ピロード友禅や刺繍などの美術染織品だ。景年が下絵を手掛けた〈刺繍額水中群禽図〉(Fig. 3)は明治33(1900)年のパリ万博において名誉大賞を獲得した。当時の12代西村による美術染織品は徹底した写生のデザインを強みとしており、景年は理想的な画家であったに違いない。他にも、景年の制作と伝わる下図類の所蔵は30件を超える。千總の所蔵品や当時の評価は、景年が千總にとって、いかにかけがえない存在であったかを教えてくれる。

参考資料

黒田譲『名家歴訪録』上編, 1899年

『今尾景年回顧展: 明治京都日本画壇の巨匠』(図録)京都府立総合資料館, 1974年

『日本人名大事典』平凡社, 1979年



(Fig. 1)『景年花鳥画譜 春之部』明治25(1892)年



(Fig. 3)今尾景年下絵〈刺繍額水中群禽図〉第5回パリ万博出品 明治33(1900)年



(Fig. 2)伝今尾景年下絵〈友禅裂百花折枝色紙文様〉明治27(1894)年

[特別講演会]

皇室文化と京都伝統の技

講師：彬子女王殿下

日時：2020年12月4日（金）午後3時～午後4時

会場：千總本社ビル5階ホール

参加者：50名

[概要]

日本の伝統文化、伝統技術はどのように後世に伝えていくべきでしょうか。ヒトとモノ、情報がかつてないほどに往来し、価値観も多様化するなかで、さまざまな分野で取り組みがなされ、議論が重ねられています。

千總文化研究所は、これまで「千總コレクションとともに日本文化の未来を考える」と題して千總の持つ有形文化財をご紹介しながら、各界の著名な研究者をお招きし、その歴史的意義と社会的位置付けをご解説いただきました。これからは、少し枠組みを広げて日本の「文化」をさまざまな視点から考察して参ります。

本講演では、彬子女王殿下をお迎えし、古来日本の文化芸術をお導きになり、またお支えになってこられた皇室の歴史、とりわけ明治時代の宮廷衣装を通して、日本の文化と伝統技術の継承についてお話しいただきました。

会場には、明治時代に千總が宮内省御用達として手がけた染織品下絵など、皇室に関わる史料を展覧しました。

[講師]

彬子女王（あきこじょう）

1981年12月20日、寛仁親王殿下の第一女子として誕生。学習院大学を卒業後、オックスフォード大学マートン・コレッジに留学。日本美術史を専攻し、在外の日本美術に関する調査・研究を行い、2010年に、女性皇族として初となる、博士号を取得。京都産業大学日本文化研究所専任研究員、京都市芸術大学客員教授、千葉大学特別教授および千葉工業大学地球学研究中心主席研究員他。

子どもたちに日本の文化を伝えるための「心游舎」を創設し、全国で活動中。著書に『日本美のこころ 最後の職人ものがたり』（小学館）、『赤と青のガウン オックスフォード留学記』（PHP研究所）、『京都 ものがたりの道』（毎日新聞社）

千總文化研究所 年報

【 第 3 号 】

2020年5月—2021年4月

Institute for Chiso Arts and Culture
Annual Report [Third issue]
May 2020—April 2021

2022年4月1日 発行

編集 一般社団法人千總文化研究所
加藤結理子、小田桃子

翻訳 株式会社ユー・イングリッシュ、Alejandro Martinez de Arbulo

アートディレクション&デザイン 株式会社フィールド

印刷 株式会社サンエムカラー

発行 一般社団法人千總文化研究所
〒604-8166
京都府京都市中京区三条通烏丸西入御倉町80